

## 第百十六話 不沈空母は画餅に帰した！

昭和 18 年、日本は守勢に追い込まれ、改めて長期持久態勢を構築した。海軍は委任統治領であった南洋群島の不沈空母化を狙って、邀撃帯構想を発令したのだが、その実態はどうだったのだろうか？

### 1 海軍第三段作戦

海軍の第二段作戦は、目標を達成することはできず、ガダルカナルを中心とするソロモンでの死闘の中で、日本軍は決定的な守勢に立たされた。ガ島撤退後の昭和 18 年 2 月に陸軍が、3 月には海軍が新たな作戦計画を策定した。海軍の第三段作戦は、1943(S18)年 3 月 25 日付で「海軍作戦方針」として発令された。長期持久態勢への転換であるが、随時積極的機會を作為して反攻米軍戦力を減殺することを企図していた。

### 2 Z 作戦要領及び邀撃帯設定要領

軍令部の方針に基づき、連合艦隊は、「Z 作戦要領」及び「邀撃帯設定要領等」を発令した。その方針は、「主作戦を南東方面に指向し、航空作戦を主体として陸軍と協同して敵の進攻を撃砕し、その間に我が戦力の充実を待って攻勢に転じて、邀撃帯を逐次推進して要域を確保する。」と云うものであった。邀撃帯は、前進根拠地を中核とし、三線の縦深を有する航空基地群をもって構成する。第三邀撃帯とされた内南洋の場合、トラックが前進根拠地、第一線基地群（マーシャル、ギルバート等）、第二線基地群（ブラウン等）、第三基地群（カロリン、マリアナ）が設定された。

### 3 本邀撃帯構想の評価と課題は

来攻する米軍と一旦間合いを切って、態勢を立て直すことは結構だし、そうあるべきだろう。また、本構想も机上のプランとしては特段の問題はない。が、実現には幾つかの前提条件が必要だ。①必要かつ十分な航空打撃戦力を保有していること。②前進根拠地及び各島嶼の航空基地が不沈空母並みの抗堪力を有していること。③各島嶼の航空基地群相互の支援が可能であること④十分な補給支援等の後方支援能力を有すること（船舶能力）等が必須の条件だ。持久と邀撃の関係は微妙だと思うが・・・

### 4 邀撃帯構想の現実

#### ① 各航空基地群の不沈空母化は画餅

抑々、航空基地を設定する各島嶼は、委任統治領であり、ワシントン条約の防備制限条約の対象地域であり、条約失効後によく手を付けたばかりだった。且つ近代の施設工事能力なく人力に頼らざるを得ず、地勢的にも飛行場不適であった。



② 日本海軍はこの時まで、相当数の航空機や搭乗員を失っており、且つ日本の航空機製造能力は米国とは相当乖離（28180 機対 96318 機）して居り、その差はますます増大するばかりであった。一方陸軍はソ連に備えるとして支那に相当数の航空機を拘置し、積極的に協力する気運はなかった。最も、陸軍機に海洋での海軍との協同作戦がスムーズに行なえたとも思えぬ。

③ 設定された各島嶼の航空基地間の相互支援は戦闘機の飛行距離の関係で在空時間が短い場合も多く、必ずしも十分ではなかった。防勢作戦での相互支援は作戦成功の要だが、厳しいものがあつた。

④ 事前集積物資も必ずしも十分でなく、かつ継続的な兵站支援も行い難いとなれば、各島嶼は自滅するしかなくなる。

⑤ 防勢作戦では、来攻する敵の時期・場所・勢力に係る情報収集が重要であるが、相応の手段を有していなかったのは致命的だ。

\* 準備未完に乗じられ、逐次各個撃破を受けたのは言うまでもない。

(第百十六話 了)